FARET TACHIKAWA ARTWORKS ファーレ立川アート作品

※このマップは緑エリアの作品紹介を掲載しています。
※This map introduces the artworks of the green area.

19

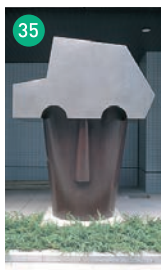
□ タン・ダ・ウ
シンガポール　1943-
Tang Da Wu
Singapore 1943-
「最後の買い物」
「Last Shopping」
換気口 vent

タン・ダ・ウは社会の矛盾やそこにひそむ暴力性などを、日常品を使って表現してきた作家です。立川の排気口ではいろいろなことを考えました。スカートをまくりあげられたマリリン・モンロー像、壁にぶら下がったフライパン、醤油やオリーブやお酢などの7つの瓶、竹の葉で包まれ吊るされたダンゴなどです。銅でつくる案が、制限によってファイバーグラスになりました。

33

□ 江上計太　日本　1951-
Keita Egami　Japan 1951-
サイン sign

江上計太は仕切られた形(グリッド)の組み合わせによる仕事をします。ここではふたつの作品、換気塔の天蓋と、ビルのてっぺんのワイヤーによるクモの巣をつくりました。金属の線の奥に見える青空は、時に無限に広がる青空よりも一層青い色を意識させることがあります。彼の作品は仕切ることによってより想像力をはばたかせる日本古来の哲学に似ているともいえるようです。



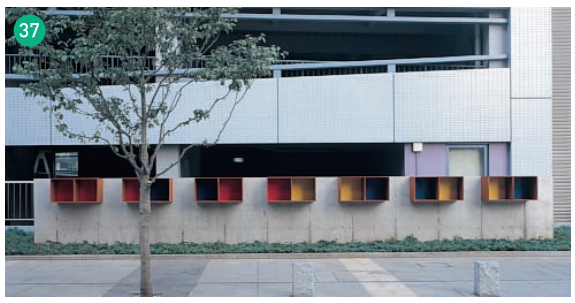
35

□ スタシス・エイドリゲヴィチウス
リトアニア / ポーランド　1949-
Stasys Eidrigevičius
Lithuania / Poland 1949-
「顔ー車」「Face-Car 」
駐車場のサイン sign for parking lot
スタシスは絵本作家として有名ですが、芝居の演出など多方面で活躍をしています。彼の仕事には仮面が出てきます。仮面は神々との交流から生まれたものですが、人を驚かすと同時に人が新しい世界に入っていく時に必要な(勇気の代わりになる)ものでした。スタシスは旧リトアニアの出身で今はポーランドに住んでいますが、人生の経緯が作品と深く結びついているようです。

40

□ 篠原有司男　日本　1932-
Ushio Shinohara　Japan 1932-
「ケンタウルス・モーターサイクル」
「Centaur Motorcycle」
駐車場のサイン sign for parking lot

これはカエルが乗ったオートバイのお化け、オートバイの神様です。篠原有司男は気合で生き、気合で仕事をしてきた作家で、その面目がこの作品にもあふれています。車輪やチェーンやスポークの形が見えるとはいえ、全体にあるのは作家の手が握った粘土のぐにょぐにょとしたかたまりの連続なのです。握って形ができていく時の体験、それは彫刻の出発点かもしれません。



37

□ ドナルド・ジャッド
アメリカ　1928-1994
Donaldo Judd　USA 1928-1994
壁彫刻
wall sculpture

ジャッドは物質のもつ本質を極限までつきつめようとした作家です。シンプルなかたちは美しい。ジャッドは立川の仕事を病床で用意しはじめ、1994年2月21日に亡くなりました。建築の条件が変化するために、ジャッドが当初設置を考えていた壁がなくなり、そのため新たな壁を用意しなくてはならなくなりました。これはジャッドの遺作となります。

36

□ チャールズ・ウォーゼン
アメリカ　1958-
Charles Worthen　USA 1958-
「水瓶」「Water Quiver」
散水栓カバー water faucet cover

ウォーゼンはチューブを使った有機的な形をよく使います。今回つくった4つの散水栓のためのカバーはすべて植栽のなかにあります。植栽は街が存在する以前にあった自然の緑を思い起こさせます。昔、人びとは水を井戸から汲み上げ、家まで器で運びました。その器のようなもので散水栓のカバーをつくろうと考えたのです。この器は、水を考える際に重要な、象徴的な意味をもっています。

39

□ パブロ・レイノソ
アルゼンチン / フランス　1955-
Pablo Reinoso
Argentina / France 1955-
「ジャガイモを収穫する人」
「The Potato Harvester」
植栽内オブジェ object in shrubbery
レイノソの作品は芽生えたばかりの植物のようです。右側のスプーンの部分にジャガイモをのせ、こぼれたジャガイモが足もとに広がるという考えは、人間の生活があってこそ美術もあるのだと気付かせてくれます。「自らが彫刻したこの匙(さじ)に、私はまた同時に、私の子どもに初めて食物を与えたこと、死の床にある父に最後の食べ物を与えたことへの、素朴な賛歌を見るのです。」

41

□ チャールズ・ウォーゼン
アメリカ　1958-
Charles Worthen　USA 1958-
「水瓶」「Water Quiver」
散水栓カバー water faucet cover

No. 36 を参照して下さい。

43

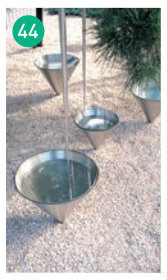
□ ホセイン・ヴァラマネシュ　イラン / オーストラリア　1949-
Hossein Valamanesh　Iran / Australia 1949-
「きみはただここにすわっていて。ぼくが見張っていてあげるから」
「You just sit here, I will keep my eyes open」
車止め bollards

ヴァラマネシュは日常の空間のなかに、思いもかけない空間をつくりあげる作家です。今回の作品はふたつの車止めという条件を守りながら、自分が使っている椅子と本をブロンズの車止めにし、自分の影を舗道にすりこみました。彼自身の日常を日本の公共空間のなかに突然登場させたのです。それは美術だけに可能な異空間の出現なのです。

42

□ スティーヴン・アントナコス
ギリシャ / アメリカ　1926-2013
Stephen Antonakos　Greece / USA 1926-2013
「Tessera-4」
壁面照明サイン illuminated sign

アントナコスはネオンという線と色をもつ素材を使って都市のなかに朝、昼、夕、夜と違った表情をつくります。2才の時にギリシャからアメリカに渡った彼のネオンの作品からはどこかカタコンベ(地下墓地)にかすかに光る灯のようなつつましくもやわらかな表情が伝わってきます。彼のネオンは都会の夜に咲くやさしい花となりました。



44

□ レベッカ・ホーン　ドイツ　1944-
Rebecca Horn　Germany 1944-
「禅庭のためのエネルギー・バロメーター」
「Energy Barometer for a Zen Garden」
植栽内オブジェ object in shrubbery

ホーンは若い頃からいろいろなパフォーマンスを行ってきました。簡単な機械を使った作品をつくることが多く、それらの変わった動きは文明に対しての鋭い批判となっています。立川では2本の松を植えました。松と金属棒とじょうごが連環し、大地と水と植物を自然のエネルギーが循環するという作品です。それは新しい土地を再生する力のシンボルになっているのです。

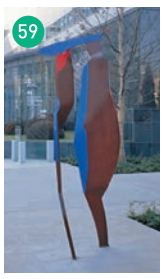
45

□ マリーナ・アブラモヴィッチ
旧ユーゴスラビア / オランダ　1946-
Marina Abramović
former Yugoslavia / The Netherlands 1946-
「黒い竜ー家族用」
「Black Dragon-for family use」
機械搬入口 equipment loading entrance
アブラモヴィッチは長い間いろいろなパフォーマンスをしてきました。現代の美術は人間の身体や動作も含めたすべてにより、新しい知覚を呼び起こそうとします。彼女は以前、一緒に仕事をしてきた男性と中国の万里の長城の両端から歩いてきて出会い、そのまま現実に永遠に別れるパフォーマンスをしました。立川ではブラジル産の水晶に頭、胸、性器をあてて瞑想する壁をつくりました。

46

□ ゲオルギー・チャプカノフ
ブルガリア　1934-
Georgi Tchapkanov　Bulgaria 1934-
道祖神 guardian deity figure

彼はいつもデッサンをしています。そのドローイングはスピードがあっていきいきしています。肖像彫刻も得意ですが、今回は立川の鉄屑屋さんをまわって、昔使われた農機具の残骸を集めてきました。耕耘機の羽根は羊の角だとか、材料を見ながらどういう動物をつくるか考えていくのでした。しかし機械はとがっていたりするので、街のなかに置くために安全にするのが一工夫でした。



59

□ エステル・アルバルダネ
スペイン　1947-2004
Esther Albardané　Spain 1947-2004
「タチカワの女たち」「Tachikawa Women」
道祖神 guardian deity figure

エステルは窓の外を所在なげに見て、何かを待っている女性をよく描きます。その女性たちが頭に乗せているのは魚や月形のもので、それが何なのか聞いても教えてもらえませんでした。女性たちがいつも待っているだけなのが同じ女性である彼女には残念なのです。彫刻の形はシンプルですが、確かなデッサンに支えられた姿は美しい。犬は作家の大好きな動物です。

47

□ 彦坂尚嘉　日本　1946-
Naoyoshi Hikosaka　Japan 1946-
赤い作品「母と子を殺した父親のようなもの」、青い作品「父親に殺された子を受精させた父親のようなもの」Red work「Like a Father Who Has Killed His Wife and Child」Blue work「Like a Father Who Fertilized the Child He Had Killed」
換気口 vent
彦坂尚嘉は美術学生の時から美術と、それを囲む社会について鋭く考えてきた人です。この排気口では全体をつくろうとしましたが、制限が多く、その限定のなかで排気口の高さについてこだわろうとしたそうです。その結果できた馬の鞍のような形は道路側からも建物側からも見て面白いものになりました。

53

□ 依田久仁夫+エステル・アルバルダネ　日本 / スペイン
Kunio Yoda+Esther Albardané　Japan / Spain
車止め(ベンチ)、道祖神
bollard(bench), guardian deity figure

依田久仁夫はできる限り少ない土を使って作品をつくろうとしています。ですから普段の作品は光を通すほど薄いものです。彼にとって土という材料は紙や木に近いやわらかなものになっています。今回のように街中の人が座るベンチという場所は彼のいつもの仕事とはあまりにも違いますが、ギリギリのかたちで彼の考えを活かして美しいベンチをつくりました。

エステル・アルバルダネ：No. 59 を参照して下さい。

56

□ 深井隆　日本　1951-
Takashi Fukai　Japan 1951-
車止め(ベンチ)
bollards (benchs)

深井隆は木彫りの作家です。そこには玉座のはばたきがあって、木を神々しいものにしてしまいます。彼は日本古来からの木彫りの魅力を現代に新しい感覚で呼び起こそうとしているかのようです。今回は車止めという設定でした。彼はこう言います。「美しい空間や環境は人をよりやさしくする。できれば私の作品もその空間に美や安らぎを奏でるひとつでありたい。」

55

□ 山本正道
日本　1941-
Masamichi Yamamoto
Japan 1941-
車止め(ベンチ)
bollard (bench)

山本正道は石とブロンズを丁寧に組み合わせた仕事をしますが、同時に風景そのものが彫刻になるような仕事もしています。彼の作品からは、時代を超えてこだわり続ける人間への関心が彫刻の本質に迫るものだという考えが伝わってきます。夢を追い、ふくらませ自分の心のなかの世界を表すという彫刻家の考え方がわかる作品です。

57

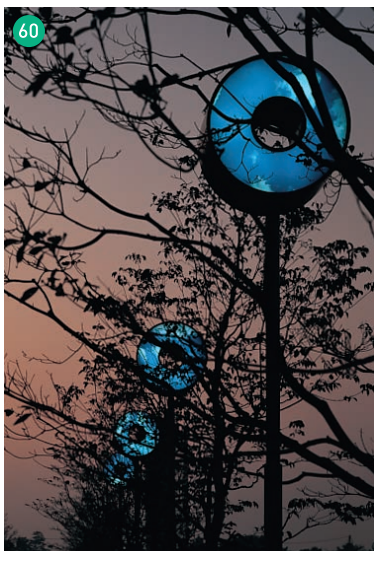
□ 片瀬和夫　日本　1947-
Kazuo Katase　Japan 1947-
「星座又は星の宿」
「Constellation, or Star Shelter」
植栽内オブジェ
object in shrubbery

片瀬和夫はできる限り省略化した形といわば禅のような思想をともに作品にとりこむことで、見る側の精神の広がりをつくろうとしているようです。ここではインド産の玄武岩の球体と日本産瓦の対比です。球にはひとつの星が、瓦にはブラジル国旗にある27個の星が刻まれています。ここには世界共通の神話に対する郷愁があるようです。

58

□ 箕原真　日本　1959-
Shin Minohara　Japan 1959-
「人の球による空間ゲート」
「Spatial Gate Made of Human Spheres」
車止め bollards

箕原真は建築家です。ここは歩行者専用でありながら、時には緊急車輌が出入りする移動可能な車止めを2ヵ所でつくりました。球体の被膜を立体と壁でつくりながら、その球体を感じさせる装置です。それを作家は球空間による「空間のモデル」と呼んでいます。車中心の都市の機構を人間中心のものへと変えていく契機があるような車止めが登場したのです。



60

□ イーエフペー
フランス
1984結成-1995解散
IFP
France 1984-1995
街灯
streetlamp

IFPは、グループの名前です。アートは作家に属するものではないという考えによって、はじめは従来のアートの考え方を変えるような仕事、たとえばシンポジウムまでをアートとするようなことでデビューをしました。ここ立川では、夜の闇にあって青空に雲が浮いているというような視覚的な美しさを重視し、環境や建築空間などの調和を追求した照明作品をつくりました。

63

□ 藤本由紀夫　日本　1950-
Yukio Fujimoto　Japan 1950-
「耳の椅子」
「Ears with Chair」
ベンチ bench

藤本由紀夫は音の装置をつくる作家です。ここでは直径6cmのパイプを両耳にあてて、目に見えない空気の姿を聞くための装置です。街は目に見えるものだけではなく、それ以上に目に見えないものでできています。騒々しい時でも、静かな時でもそれらの環境がつくる音はパイプを通って耳に達します。その時パイプの共鳴によって独特の唸りをもった音になるのです。

61

□ アレシュ・ヴェゼリー　チェコ共和国　1935-2015
Aleš Vešelý　Czech Republic 1935-2015
「ダブルベンチ」「Double Bench」
ベンチ bench

ヴェゼリーは石や鉄など力強いものの衝突によって、より以上の力のありかを示そうとする仕事をしてきました。それはしばしば物理学の実験のような緊張した美しさを表します。彼はこの仕事のために100回もディテールを考えたそうです。デッサンは決定的な形体をつかむまで繰り返されます。それらを見ると作家と作品の内面と構造が、形体とともにわかってくるのです。

64

□ ウルリッヒ・リュックリーム
ドイツ　1938-
Ulrich Rückriem　Germany 1938-
植栽内オブジェ object in shrubbery

リュックリームは切断する以前の石のもつ形態と性質をそのまま活かしながら、石がもつあまり知られていないやわらかさや透明感を美しい形でさし示す作家です。彼は切断した石を鉄でつないだりしません。自重によって石は安定するのです。今回は安全上、鉄で上下の石をつなぎましたが、彼は不満でした。石と対話する作家は石のことを法律家よりもよく知っているのです。

62

□ アニッシュ・カプーア
インド / イギリス　1954-
Anish Kapoor
India / UK 1954-
「山」
「Mountain」
植栽内オブジェ
object in shrubbery

空間は形ある物質によってつくられるだけでなく、その形からつくりだす形以外の無の空間によって構成されます。カプーアは立体による新しい空間をつくりだしてきた作家です。欧米型の物質の量感をもとにしたり、空間の均質化にもとづいた構築的な空間ではなく、いわばアジア的な自然と精神の広がりをもちながらも、素材そのものの形や性質を大切にした空間をつくります。

65

□ 川俣正　日本　1953-
Tadashi Kawamata　Japan 1953-
倉庫
storage

川俣正は古い建物を廃材で囲む、水辺に小屋をつくるなど、幻覚的ともいえる空間を風景のなかにつくってきた作家です。物置を街中に置いたりもします。彼は街を歩き、街や建物に隠された記憶や意味を、木の断片や小屋の設置によって新しく見せようとするのです。街というキャンバスに描かれた美しい線が、都市と時間がもつ激しくなつかしい関係を知らせてくれるのです。

66

□ ジョナサン・ボロフスキー　アメリカ　1942-
Jonathan Borofsky　USA 1942-
「ブリーフケースをもった男」「Man with Briefcase」
道祖神 guardian deity figure

ボロフスキーはずっと自分自身の姿をつくってきました。この鉄の労働者も自分が描いたデッサンをつめたブリーフケースをもっている作家自身です。足もとの数字は作家自身が埋めていった時間の経過を表しています。この社会のなかの自分をあたりまえな日常のなかでカウントすることが人間の孤独な存在を表しているようです。この像はこの地域で働く人の姿にも見え、共感を呼びます。

次世代アート
□ 原仲裕三　日本　1957-
Koso Haranaka　Japan 1957-
「ファーレ立川の風-敬愛するJean-Pierre Raynaudに捧ぐ-」
「Le vent de Tachikawa -Hommage à Jean-Pierre Raynaud-」
2006年のファーレ立川アート修復再生事業の完成記念として行われた「ファーレ立川次世代アート作品公募」の最優秀作品です。作品はタイトルの通りNO.70ジャン・ピエール=レイノー作品のオマージュで、立川のまちが自然と共存し発展することを願いつくられました。東・西・南・北の各面に青・白・赤・黒の4色のタイルが貼られ、埋め込まれた鉄パイプからは風の音が聞こえます。

アートツアーのご案内 ーファーレ立川アートの魅力をもっと知りたい方におすすめー
ボランティア団体「ファーレ倶楽部」が参加人数(1人からOK)、日時、見学時間などご希望にあわせて作品を案内します。

お問い合せ
ファーレ倶楽部 http://faretclub1997.net/

発行 ： 立川市　〒190-8666　東京都立川市泉町1156-9　℡042-523-2111(代表)　監修 ： 株式会社アートフロントギャラリー　写真 ： 安斎重男
デザイン ： 宮内賢治　印刷 ： 福永紙工株式会社　発行日 ： 2017年9月15日